

# 談話資料から見た伊豆松崎町方言のアクセント

木川 行央  
神田外語大学

伊豆半島南部の方言のアクセントは、東京式アクセントではあるが、隣接する地域や東京とはその様相がかなり異なるものとして有名である。今回は、読み上げなどの調査によるのではなく、自然な状態でのアクセントを観察するため、松崎町池代における自然談話を資料として、その実態を見た。その結果、先行研究に報告があるような揺れの大きさを確認するとともに、その揺れには東京語のアクセントとの対比の上で一定の傾向があることを数量的に示し、男女によると考えられる差があることも確認できた。また、この方言のアクセントは、特殊拍の後により下がり目が来ることを許すが、それがアクセントの型を決めるものではないということも確認した。

## 1. はじめに

伊豆半島南部（下田市の一部および賀茂郡の西伊豆町・松崎町・南伊豆町・賀茂村）方言のアクセントは、東京式アクセントではあるが東京や隣接する地域とはかなり様相が異なるという指摘は、馬瀬良雄（1961）、前川秀雄（1970）など従来からなされており、またその実態の詳細についても、中條修（1976、1983、1996）、山口幸洋（1987、1996、1998、2001、2002）、亀田裕見（1994）などで報告・分析されている。これまでに報告されてきた特徴的な点は、2. に見るように、個々の単語のアクセントのレベルのみではなく、文のアクセントのレベルにおいてもみられる。しかし、この特徴的なアクセントは、次第

に消滅しつつあり、中條(1966)によれば、「伊豆南部特殊アクセントは、時代の推移とともにその特色を少しずつ薄めながらも、昭和中期生まれ(1950年代)の中年層までは受け継がれている」が、「それ以降のテレビの普及とともに成長した『テレビっ子』と呼ばれる世代」においては「東京語とほとんど変わらないアクセントになっている」(p. 1013)。

そこで、この地域のアクセントの実態を詳細に記録すること、特殊アクセントから「東京語とほとんど変わらないアクセント」への変化の過程を記録することを目的として調査を開始した。本稿においては、まず賀茂郡松崎町池代における現在の高年層のアクセントの状況を見る。この地点のアクセントは、中條(1996)において詳述されているが、今回は、読み上げなどによるいわゆるアクセント調査によるのではなく、自然談話をもとに見ていく。談話資料を用いることの利点としては、より自然な発話を観察することが出来るという点がある。また、この地域のアクセントは複数の型で現れることがあり、先行研究でも、ある型で発音されることが多いあるいは少ない、といった記述が見えるが、談話の中でどのような発音がどの程度なされるかという観点から、数量的に説明することも出来よう。さらに、変化を見ていく際にも、量的な変化としてみていくことが可能になると考える。

なお、上述のようにこの地域のアクセントは文レベルのアクセントも特徴的であり、それと語単位のアクセントが密接に関連しているとも考えられるが、今回は、文のアクセントについては言及せず、まず語のアクセント、その中でも名詞のアクセントについてのみ報告する。

## 2. 南伊豆方言アクセントの特徴

松崎町池代のアクセントについて、まず語のアクセントの特徴を中條(1996)により確認しておこう。同論文の記述をまとめると以下のようになる。

- 1 1拍名詞は、「男性には東京語アクセントと同様、1・2類と3類の間に平板型／頭高型の対立を認めてよい」(p. 1001)が、

「女性の場合は、1・2類が頭高型に実現される傾向がきわめて強く、一見、平板型を欠く状態にあるとするのが妥当と考える。なお、3類の名詞は男性と同様、平板に発音されることはほとんどない」(p. 1002)。

- 2 2拍名詞は、2・3類、4・5類は男女とも、東京と同じく前者は尾高型、後者は頭高型で、「比較的安定している」(p. 1004)。1類は、男性は東京と同じく平板型（ただし高低差は小さくなることもある）になり時に尾高型になるが、女性は尾高型になる。
- 3 東京語で頭高型になる「貝、金、塔」など「第2拍に/i/、/N/、/R/が立つ語は、松崎では男女を問わず」尾高型に発音される(p. 1004.)。
- 4 3拍名詞は、男女とも平板型、尾高型、頭高型、中高型の4種を認めて良いが、平板型と尾高型は「型の変化を起こしつあり、揺れや変化が観察される」(p. 1008)。この揺れは女性に多く見られる。また、中高型に発音される語は東京語より多く、「東京語アクセントの頭高型に対応する例が目立ち、その多くは東京語より古い相を示している」(p. 1007)。また、中高の語に付属語が伴う「アクセント節では山を後ろに押し出す傾向が見られ、尾高下型への揺れや変化が観察される」(p. 1008)。

また、1. でも述べたように、文レベルのアクセントも特徴的である。山口(1998)では、賀茂郡(賀茂村宇久須、松崎町仁科、南伊豆町伊浜・入間)において見られる特徴として、以下のような場合に「節末下降」が生じるとしている。節末下降とは、強調する場合ではないのに、「カ[オオ]アラウ」(以下低から高への境界を[、高から低への境界を]で示す)のように、「連文節先行部において、東京語の無核型の語」(p. 321)を含む節の次に下降が生じることを言う(例は山口 1998 に挙げられているものであるが、記号は上記のものに変えてある。また下線の有無も山口 1998 の記述に従う)。

①更新的な場合：ヒ[ガシノ]カ[ゼノホ]ーガ

②卓立的な場合：ハンダン[ガ]ツカナイ

③一体的な場合：[ソー]シナ[サ]イ、[ナントーノ]カゼ[ネ]ー

④反復的な場合：チ[ガー]チガー

⑤下降を持つ副詞の前：ヒ[ガシワ]マ]ー

⑥文末助詞直前：[フ]ワフワガタデ]サー

さらに、下田市須崎では、次のような場合にも「節末下降」が生じるとしている。

⑦接続助詞直前：[デンワ]ンカカッタ]モンデ

⑧間投詞、副詞直前：ソ[ノママ]ハイ、ミーン[ナ]アノ、シ[ケンジョーデ]アノ

このような「節末下降」は、池代方言においても頻繁に見られる。そして、語のアクセントが「東京語とほとんど変わらない」ものとなるのと平行して、この節末下降も現れなくなっている。そこには何らかの因果関係があることも予測される。ただし、本稿では上記のように、この現象については触れず稿を改めて考察したい。

### 3. 資料について

今回資料としたのは、2003 年 10 月に静岡県賀茂郡松崎町池代において録音した自然談話である。この談話は下の 3 名の話者と、池代に隣接する大沢在住の中年層男女各 1 名を加えた 5 名で行われたものであるが、この大沢在住の 2 名は発話量が少なく、かつ池代出身ではないので、今回は分析対象としない。

- A 男性 1926(大正 15)年生まれ 池代生まれ  
池代以外の在住歴無し
- B 女性 1927(昭和 2)年生まれ 池代生まれ  
池代以外の在住歴無し
- C 女性 1928(昭和 3)年生まれ 池代生まれ  
池代以外の在住歴無し

録音場所は、話者Aの自宅である。3名は非常に親しく、上記大沢中年層話者とも親しい関係にある。さらに、AおよびCの結婚の時の話を中心に家族のことなどが話題となっていることもあり、談話は非常になごやかで、自然なものとなっている。また、話題がAとCを中心とすることもあるため、発話量はAが最も多く、Cがそれに次ぐ。なお、今回資料とする談話の録音時間は約90分である。

#### 4. 集計法について

本稿では数量的に処理する際の基準として、東京語のアクセントとの対応を用いた。たとえば東京語で頭高の語が、この談話中でどのような発音が何回なされたか、ということを集計したわけである。東京と池代でもともとアクセントが異なる、すなわち本来別のグループに属する語であるということも当然あり得る。しかし、調査者の指定した特定の語を何度か発音してもらうという調査ではなく、かつこの地域のように、語のアクセントが何通りにも発音される地域における集計であること、また他の資料との比較を可能にすることを考え、便宜的ではあるが、この方法をとった。また、このように処理することが、可能かどうかの検討するという面もある。今後さらに検討を加える必要があるが、結果からいえば、今回の分析結果から、この地点においては、この方法でも一定程度の説明が可能であると考えられる。

東京語のアクセントは基本的に『新明解日本語アクセント辞典』によるが、さらに以下の処理を行った。

- ・『新明解日本語アクセント辞典』で「古」や「地域的に」などとして、括弧内に示された型は取らない。
- ・複数の型がしめされている語は集計から除く。
- ・同辞典に、掲載されていない方言形などは集計から除く。ただし、掲載されていなくても、複合語・派生語などで、規則的にアクセントが決まる語は、その型を東京語のアクセントとする。

なお、中條(1996)に指摘があるように、この地域のアクセントに男女差がある可能性があるため、集計は男女別に行う。

## 5. 2拍名詞

まず、2拍名詞を見ていこう。2拍名詞に助詞が接続する場合の実際に現れる形としては、○●▲、○●△、●○△の他に、●●▲、●●△、○○▲さらに、●○▲、○○△と高低2段階で考えられるすべての形が現れる（○△はその拍が低く、●▲は高く発音されることを表わす。また、○●は名詞、△▲は助詞を表わす）。ただし、高と低の差が小さい場合もあるので、たとえば○●と●●を明確に区別するのが困難な場合もある。また、亀田(1994)のように、高と低の中間段階も認めれば、現れる種類はさらに増える。そこで、以下では、下がり目の有無およびその位置のみを問題とする。なお、高い部分が二カ所以上に別れて発音される場合、中條(1996)のようにどちらかの高が意味を持つ、すなわち核となるという解釈が出来るであろうが、今回は現れたままの形で集計していく（ただし、池代においては、このような擡頭・擡尾現象はあまり多くは現れない）。

以上のような手続きで集計した結果が表1である。この表の横軸の0は下がり目のない発音（上記のように下がり目の有無と位置だけを問題とするので○●▲、●●▲、○○△、○○▲を含む）、1・2はそれぞれ、1拍目の次に下がり目がある発音（●○△）、2拍目の次に下がり目のある発音（○●△、●●△）、13は1拍目と3拍目が高くなる発音（●○▲）であることを表わす（以下3拍・4拍名詞も同様に処理する）。また、△・▲は1拍の助詞を表わすのではなく、助詞・助動詞の第1拍目を表わす。すなわち、ここでは後続する助詞・助動詞の種類・拍数を問わずそれぞれの第1拍目の高低を示している。助詞の中には「の」など、前に来る語の型によっては他の助詞・助動詞とは異なるアクセントになるものもあるが、それについては集計表中の括弧内に内数を示す。さらにいわゆる形容動詞は、この地域において、連体修飾の場合に「静かの人」のように「の」が用いられることが多く、名詞との区別が東京語よりさらに困難であるという事情もあり、名詞の中に含めてある。なお、表1は、助詞・助動詞

表1 2拍名詞（助詞・助動詞が接続する場合：総計）

東京	話者	0	1	2	1 3	計	異なり語数
○●▲	A	249(43) 69.9	19(3) 5.3	86(12) 24.2	2 0.6	356(58)	3 5
	B C	132(19) 60.8	1 0.5	83(15) 38.2	1 0.5	217(34)	3 1
	B	24(3) 66.7	0	11(4) 30.6	1 2.8	36(7)	2 1
	C	108(16) 59.7	1 0.6	72(11) 39.8	0	181(27)	2 8
○●△	A	45(4) 45	3 3	52 52	0	100(4)	2 1
	B C	46(4) 45.5	0 0	55(5) 54.5	0	101(9)	2 3
	B	11(1) 47.8	0	12(3) 52.2	0	23(4)	1 2
	C	35(3) 44.9	0	43(2) 55.1	0	78(5)	1 9
●○△	A	69(14) 29.5	50(6) 21.4	115(18) 49.1	0	234(38)	3 8
	B C	24(1) 25.3	7(1) 7.4	64(8) 67.4	0	95(10)	3 0
	B	8 47.1	0	9(2) 52.9	0	17(2)	1 1
	C	16(1) 20.5	7(1) 9.0	55(6) 70.5	0	78(8)	2 6

が接続する場合のみであり、助詞・助動詞が接続しない形で現れた場合については表2に示す。各欄上段は実数、下段はそれぞれの話者の発話の中での百分率である。

まず、上記のように中條(1996)では、東京語で平板となる1類には、男女差があり、男性は平板型になる事が多いが、女性は尾高型になることが多いと報告されている。これは、今回の結果からも見て取ることが出来る。男性話者であるAは平板で発音する割合が、女性話者B・Cに比べて高く、逆に起伏になる割合は、女性話者の方が高い。頭高の発音については男性であるAの方が高くなっているが、これは次に見る東京語が頭高型の場合と平行している。これら、平板、頭高、尾高の男女による違いは、有意なもの（カイ自乗検定5%水準による）と見る事が出来る。

ただ、この差が男女差ではなく、個人差ではないのかという点が問題となる。今回検討できるのは、女性話者BとCの差であるが、話者Bの方が話者Aに近い割合となっており、個人による差も大きい可能

性がある。しかし、今回の結果からはBとCの間に有意差があるとはいえない。なお、以下では出現数の少なさなどによりBとCの間の検定が困難である場合が多いため女性話者をまとめ、男性話者と対比していく。

次に、東京語で尾高型、頭高型となる2・3類、4・5類は、中條(1996)によれば、男女差が無く東京語と同じ型で発音され、比較的安定しているということであった。いま、類ではなく、東京語の尾高型、頭高型の語との比較でみると、今回の結果は、必ずしもそのようには言えない。東京語で尾高型となる語は、男女差はなく、尾高型で現れることが多いが、平板型で発音されることも多い。また、東京語で頭高型となる語は、頭高が少なく、尾高で発音されることが多い。ただし、以下に見る他の拍の頭高も同様であるが、金田一(1943)で、2拍頭高の語が下田で「第二音節の初めの部分まで高く、第二音節の途中で声が降るように観察された。此等の地方では〇〇〇型の語は総てかう成る傾向があるやうである」(p. 11)という記述があるように、聞き取りの問題が難しいということがある。この点については、あらためて検討したいが、今回は筆者の聞き取りでの結果をもとにする。なお、7. においても、これに関連した点について言及する。

さてここで問題となるのは、語による違いである。上記男女差および中條(1996)との違い、さらに東京語との対応において型に揺れがあることが、特定の語の影響なのかそうではなく、一般的な傾向としてあるのかを確認しておく必要がある。表2はAとB・Cがともに5回以上発話した語とそれ以外に分けて比較した表である。

発話数が5回以上の語において、全員がすべて同一の型で発音する語はなく、現れる割合に多少はあるが、様々な発音がされている。したがって、表1に見えるアクセントの揺れが、出現する語の偏りによるものではなく、個々の語においても生じる揺れであることが分かる。それぞれのグループごとにみていくと、まず東京語で平板型になる語は、平板と尾高で現れる割合が語によってかなり異なり、男性の方が多いいわれる平板でも「これ・あれ・人」は女性の方が平板で発音



表2 2拍名詞(助詞・助動詞が接続する場合:語別)

東京	語	話者	0	1	2	1 3	計
○●▲	それ	A	57(1)	8	14	0	79(1)
		B C	72.2 22 59.5	10.1 1 2.7	17.7 13(1) 35.1	1 2.7	37(1)
	これ	A	25	3	9(1)	1	38(1)
		B C	65.8 5 71.4	7.9 0	23.7 2 28.6	2.6 0	7
	あれ	A	23	2	4	0	29
		B C	79.3 20 90.9	6.9 0	13.8 2 9.1	0	22
	家 (うち)	A	11	0	9	0	20
		B C	55 15(3) 53.6	0	45 13(4) 46.4	0	28(7)
	俺 (おれ)	A	54(10)	1	12(2)	1	68(12)
		B C	79.4 1(1) 16.7	1.5 0	17.6 5 83.3	1.5 0	6(1)
	ここ	A	19(11)	0	9(4)	0	28(15)
		B C	67.9 4(3) 28.6	0	32.1 10(5) 71.4	0	14(8)
	人	A	5	1(1)	8(1)	0	14(2)
		B C	35.7 20(2) 83.3	7.1 0	57.1 4 16.7	0	24
	上記以 外の語	A	55(14)	4(1)	21(2)	0	80(17)
		B C	68.8 44(10) 56.4	1.3 0	26.3 34(5) 43.6	1 1.3	78(15)
○●△	事	A	8	0	6	0	14
		B C	57.1 10 47.6	0	42.9 11 52.4	0	21
	時	A	11(1)	2	10	0	23
		B C	47.8 6 37.5	8.7 0	43.5 10 62.5	0	16
	物	A	8	0	0	0	8
		B C	100 3 60	0	2 40	0	5
	好き	A	3	0	6	0	9
		B C	33.3 3 37.5	0	66.7 5 62.5	0	8
	上記以 外の語	A	15(3)	1	30	0	46(3)
		B C	32.6 24(4) 47.1	2.2 0	65.2 27(5) 52.9	0	51(9)
●○△	今	A	2(1)	6(1)	27(12)	0	35
		B C	5.7 4(1) 13.3	17.1 4(1) 13.3	77.1 22(6) 73.3	0	30
	衆	A	9(1)	1	8	0	18
			50	5.6	44.4		

		B C	5 71.4	0	2 28.6	0	7
方 (ほう)	A		8(1) 53.3	1 6.7	6 40	0	15
	B C		3 42.9	0	4 57.1	0	7
上記以 外の語	A		50(11) 30.1	42(4) 25.3	74(4) 44.6	0	166(19)
	B C		12 23.5	3 5.9	36(2) 70.6	0	51(2)

する割合が高い。しかし、総体的に見ると男性は 60 ～ 70 % 程度の割合で平板で発音することが多く、一方女性は男性より語による違いが大きく、平均して言えば 50 ～ 60 % の割合で平板で発音する。この結果からも、平板で発音するか尾高で発音するかについて、男女の話者によって差が認められそうである。

次に東京語で尾高型になる語であるが、語ごとに見てもやはり尾高と平板の間で揺れが見られ、安定しているとは言い難い。むしろ、東京で平板型になる語が、池代では揺れがあるにしても平板で発音されることが多いのに対し、これらの語は平板と尾高の出現頻度の差がそれよりも小さい。しかし、出現頻度の多い語は「こと、とき、もの」で、これらは前に修飾語を取り、一続きに発音されることが多く、それによって高低差がなくなり平板になることが多い。したがって、これらの語は別に考える必要があるだろう。ただし、これらを除外して考えるにしても、やはり揺れがあると考えerべきであろう。なお、男女差については、検定によっても有意な差はないと見て良い。

なお、助詞「の」が接続する場合であるが、話者 A は東京語と同様、「の」が高く、平板に発音されている。それに対し、話者 B・C では平板、尾高ほぼ同数である。しかし、総数が少なくもあり、池代において助詞「の」が接続する場合のアクセントについては、今のところ明確にはしがたい。

東京語で頭高型になる語にも、尾高型の場合と同様の傾向がある。まず、表 2 で「衆・方」の平板で現れる割合が高くなっているが、これは上記の「こと・とき・もの」と同様の事情が考えられる。これを除いて考えると、男女とも 20 ～ 30 % の割合で平板で発音するが、起

伏で発音されることが多いということになる。ただし、起伏という時、頭高になるか尾高になるかということでは男女差が認められる。すなわち、男性の方が頭高で発音することが多く、女性は尾高、すなわち下がり目が一つずれた形で発音することが多い。なお、頭高型に対応する語の「上記以外の語」において話者Aの数が特に多いのは、発話総量が多いということもあるが、自称である「オラ」を発する回数が多かったためである。

ここまで見てきたのは、助詞・助動詞が接続する場合であったが、助詞・助動詞が接続しない場合はどうか。表3がその結果である。これは、読み上げの調査ではないので、その語だけを発音した場合ということではなく、文中で無助詞で用いられる場合などである。2拍名詞であるので現れるのは、当然下がり目がない場合（0）とある場合（1）のみである。東京語で平板型・尾高型となる語は、東京語と同じく下がり目なく発音される。そして、その割合は助詞・助動詞が接続する場合より、揺れが少なく、東京語と同様の発音である。しかし、東京語で頭高型になる語は、助詞・助動詞が接続する場合と同様揺れが大きい。助詞・助動詞が接続する場合と併せると、東京語で頭高型になる語は、やはり尾高で発音されることが多いと言えよう。

以上、見てきたところをまとめると、東京語アクセントで平板型になる語は平板に発音されることが多いが、尾高で発音されることもあり、そこには男女による差がある。これは中條(1996)の報告と同じで

表3 2拍名詞（助詞・助動詞が接続しない場合）

東京	話者	0	1	計	異なり 語数
○●▲	A	83 94.3	5 5.7	88	15
	BC	55 91.7	5 8.3	60	15
○●△	A	19 95	1 5	20	8
	BC	31 91.1	3 8.8	34	14
●○△	A	43 51.2	41 48.8	84	18
	BC	58 76.6	20 23.4	78	10

ある。それに対し、尾高型の語は尾高で発音されることが多いが、平板でも発音され揺れの大きさとしては、東京の平板型にあたる語よりも大きい。また、頭高型の語も尾高で発音されることが多い。したがって、頭高型が安定した型であるとは考えにくいということになる。中條(1996)との違いが、話者の違いによるものか、調査法の違いによるものか、あるいは世代差によるものか、さらには頭高の聞き取りの違いによるものかは、他の資料との検討によって考えたい。

## 6. 1 拍名詞

次に1拍名詞であるが、出現数が非常に少ない。表4がその集計結果である。この結果だけから見ると、やや揺れはあるが、男女とも東京語のアクセントと同様の発音をするように見える。しかし、東京語の頭高型となる語が女性で多くなっているのは形容動詞「嫌(や)」を含めているからである(この語は、『新明解日本語アクセント辞典』には記載が無く、先にあげた基準から言うと除外される語であるが、頻度の多さと、『日本国語大辞典 第2版』にアクセントが記載されているということで、集計に加えた)。話者B・Cともに、相づち的に「ヤダ」を使うことが多く、またこの語が多くの場合頭高で発音されるため、東京語で頭高で発音される語が池代の女性話者でも頭高で発音されることが多いように見えるのである。この語を除くと、東京語で頭高の語は、B・Cでは7回しか現れず、そのうち頭高となるのは2回のみであり、平板で発音されることの方が多いという結果になり、中條(1996)の結果とは異なるが、2拍名詞(および3拍以上

表4 1拍名詞(助詞・助動詞が接続する場合)

東京	話者	0	1	計	異なり語数
○▲	A	19 86.4	3 13.6	22	5
	B C	10 83.3	2 16.7	12	2
●△	A	11 30.6	25(1) 69.4	36(1)	1 3
	B C	20(1) 34.5	38 65.5	58(1)	6

の名詞) と共通する結果であるといえよう。しかし、出現数が極端に少ないため、参考とするにとどめる。

## 7. 3拍名詞

3拍名詞で助詞・助動詞の接続する場合の集計結果は、表5のとおりである。またここでも、揺れが語の違いによるものではないことを確認するために、出現数がAとB・Cともに5回以上の語を、表6に上げる。ただし、これに該当する語は東京語の平板型と尾高型に当たる語しかなく、また個々の語の出現数も少ないので、実数のみを示し、また他の語の総計も上げない。

まず東京語で平板型の語については、平板と起伏の間で揺れが認められる。そして、この揺れには男女話者で差（カイ自乗検定によって有意差が認められる）が認められ、男性話者の方が平板で発音する割合が高い。これは、表6を見ても、若干の例外はあるが、確認できる。この、平板と起伏の間での揺れおよび男性の方が平板になる割合が高いという傾向は2拍名詞の東京語で平板型になる語と共通するものである。

表5 3拍名詞（助詞・助動詞が接続する場合）

東京	話者	0	1	2	3	14	13	24	134	計	異なり 語数
○●●▲	A	120(5) 62.5	7 3.6	38(4) 19.8	20(1) 10.4	2 1.0	3 1.6	1 0.5	1 0.5	192 (10)	6 5
	B C	70(5) 37.6	4 2.2	55(12) 29.6	48(4) 25.8	2 1.1	0	7 3.8	0	186 (21)	5 2
○●●△	A	19(4) 27.5	0	5(1) 7.2	43 62.3	2 2.9	0	0	0	69 (5)	2 2
	B C	22(4) 57.9	0	1(1) 2.6	8(1) 21.1	1 2.6	3 7.9	2 5.3	1 2.6	38 (6)	1 6
○●○△	A	3(2) 14.3	0	6 28.6	12(1) 57.1	0	0	0	0	21 (3)	1 3
	B C	6 31.6	0	2(1) 10.5	11 57.9	0	0	0	0	19 (1)	1 2
●○○△	A	9 9.2	4 4.1	75(11) 76.5	7(1) 7.1	0	0	3 3.1	0	98 (12)	4 7
	B C	4 8.5	4 8.5	27(2) 57.4	12(1) 25.5	0	0	0	0	47	2 8

表6 3拍名詞（助詞・助動詞が接続する場合：語別）

東京	語	話者	0	1	2	3	14	13	24	1 3 4	計
○●●▲	お前	A	4	1	1	0	0	0	0	0	6
		B C	2 (1)	0	2	4 (2)	0	0	0	0	8 (3)
	子供	A	8	0	4 (1)	0	0	0	0	0	12 (1)
		B C	1	0	3	4	1	0	2	0	11
	自分	A	9	1	3 (1)	2 (1)	0	0	0	0	15
		B C	4	0	6	5	0	0	0	0	15
	昔	A	2	0	5	0	0	0	0	0	7
		B C	4	0	1	1	0	0	0	0	6
	一緒	A	16	0	0	3	0	0	0	0	19
		B C	2	1	0	5	0	0	0	0	8
	本当	A	3	0	0	2	1	0	0	0	6
		B C	2	0	10 (3)	4 (1)	0	0	0	0	18
	容易	A	1	1	0	1	1	2	0	0	6
		B C	9	0	2	2	0	0	0	0	13
○●●△	話	A	6	0	2	20	0	0	0	0	28
		B C	5	0	0	4	1	0	0	1	10

東京語で起伏型の語にも揺れがあるが、東京語が尾高型か中高型か、あるいは頭高型かによって違いがある。尾高型の語の場合、女性では東京語で平板型の語より、平板で発音される割合が高い。語数・出現数ともに東京語で平板型の語より少ない点が問題ではあるが、その中でも平板に割合が高いと言うことは特徴的であるといえよう。男性話者も、平板で発音することがあるが、女性話者に比べてその割合は少なく、男性が尾高で発音する割合が高いこともあわせ、有意な差があることが、検定によっても確認できる。

東京語で中高型の語も、揺れは見られるが、男女とも、尾高で発音される割合が最も高い。また、東京語で頭高型の語は男女とも中高で発音される割合が最も高いが、尾高なることも多い。東京語と同じ中高で発音される割合は男性が女性より有意に高く、女性が尾高で発音する割合も有意に高い。

なお、この地域の方言で3拍名詞のアクセントの型として、頭高型を認めるか認めないかは、地点・調査時期の違いという問題もあるが、従来の報告の間に違いがある。まず、池代も調査地点とする中條(1996)は、3拍名詞の型の種類として頭高型を認めている。一方、馬瀬(1961)は「西伊豆町松崎(マ)の話者(二二歳男子)」では、下田で尾高になる「頭」、中高になる「命」、頭高になる「兜」が、「それぞれ

《○●●▲、○●●△、●●○△》のような相をとり、アクセントの山は一モーラずつ後退し型としても固まっている」(p. 332。なお原文では《 》は二重の( )、△▲は横向き)、として音韻論的解釈でも頭高はたてていない(全くたてないのかどうかは、不明であるが)。また、前川(1970)は、馬瀬(1961)が頭高型をたてている「下田町」の3拍名詞のアクセントとして頭高型をたてていない(2拍名詞4・5類については、頭高型をたてているが、これらの語も単独では頭高、助詞がつくと尾高になることが多いとしている)。また、南伊豆町入間方言を対照とする亀田(1994)も、頭高型を認めている。これらは、調査時期も地点も同一ではないのでそれぞれの時期・地点の状況による違いとも考えられるが、話者の個人差や量的な違いをどのように考えるかによる違いとも考えられる(また、5. で言及した聞き取りの問題もあろう)。本稿では音韻論的な解釈を施すわけではないが、少なくとも現在の池代の高年層話者においては、東京語で頭高型になる語も含め、頭高はほとんど現れない、ということはいえよう。

以上、東京語と池代のアクセントの型を比較すると、東京語の頭高型・中高型は、池代ではそれぞれ下がり目の位置を一つずつ後ろにずらしていることになる。これは、馬瀬(1961)等でも言われている「下降位置の後退現象」である。そして、馬瀬(1961)では言及されていないが、東京語で平板型の語が中高・尾高で発音されることが多いのも、これによって説明することが出来る。すなわち、平板型の下がり目を後ろにずらすと頭高になるが、池代において頭高の発音は避けられ、下がり目をさらに後ろにずらした結果中高に、そして女性は東京語で頭高の語が尾高になることもあるのと平行して尾高でも発音することが多くなっている、という訳である。このような「後退現象」は、2拍名詞でも同様に考えることが出来る。さらに1拍名詞でも、尾高型の揺れが多いことも説明できる。

また、男女話者の差を見ると、男性は東京語の平板型と尾高型の語を、東京語と同じアクセントで発音する割合が高い。一方、東京語の中高型と頭高型の語では、男性も東京語の下がり目より後ろに下がり

表7 3拍名詞（助詞・助動詞が接続しない場合）

東京	話者	0	1	2	1 3	計	異なり 語数
○●●▲	A	98 79.6	3 2.4	21 17.1	1 0.8	123	3 0
	B C	34 63.0	1 1.9	19 35.2	0	54	1 8
○●●△	A	28 75.7	0	8 21.6	1 2.7	37	1 4
	B C	17 34.7	3 6.1	29 59.2	0	49	9
○●○△	A	3 21.4	1 7.1	10 71.4	0	14	7
	B C	8 50	0	8 50	0	16	6
●○○△	A	2 5.6	8 22.2	26 72.2	0	36	2 0
	B C	8 29.6	3 11.1	16 59.3	0	27	1 4

目のある発音をしている。しかし、女性はこれらの語を、さらに下がり目が後ろにある発音をする割合が高い。すなわち、男性話者より女性話者の方がこの後退現象は盛んに起す、ということになる（ちなみに、馬瀬 1961 によれば後退現象は若年層で盛んであるとするが、平山輝男 1957 や中條 1996 によれば、東京語で頭高型の語が中高型で発音されるのは東京でも古い相であるとされる。このあたりの新古関係も問題になろう）。

さらに、助詞・助動詞が接続する場合としない場合の比較のため、助詞・助動詞簿接続しない場合の集計を表7にあげる。

助詞・助動詞が接続する場合としない場合を比較すると、東京語での尾高・中高型が男女とも、助詞・助動詞が接続しない場合より、接続する場合に平板に発音される割合が有意に多い。逆に接続しない場合は接続する場合より有意に中高で発音される割合が高い。ただし、特に助詞・助動詞が接続する場合は、出現数が少なく、ここで一般的な傾向とすることは控えたいと思う。

## 8. 4拍名詞

4拍以上の名詞は、出現数が少ない上に、拍数が多くなる分、現れる発音の種類が多くなり分散も大きくなる。そこで、集計は実数のみ



をあげた。また、「の」が接続する場合の内数も省略してある。表8が助詞・助動詞が接続する場合、表9が接続しない場合の集計である。なお、東京語で頭高型になる語が、助詞・助動詞を接続しないで用いられた例はなかった。

さて、表8および9から、4拍名詞の場合も、上で見てきた傾向があるように考えられる。まず、東京語で平板型になる語は、様々な発音がなされるが、男性話者においては、平板で発音されることが最も多い。それに対し、女性話者においては2拍目の次に下がり目のある発音が最も多くなっている。この男女による差、およびそれぞれの最も多くなる発音も3拍名詞の場合と同様である（3拍名詞の場合、女

表8 4拍名詞（助詞・助動詞が接続する場合）

		0	1	2	3	4	1 4	2 4	2 5	245	計	異なり 語数
○●●●▲	A	4 1	2	1 0	1 0	1 7	0	0	0	0	8 4	5 5
	BC	1 3	1	2 1	1	4	1	1	4	0	4 6	2 6
○●●●△	A	6	0	0	0	3	4	0	0	0	1 3	5
	BC	1	0	0	0	3	0	0	1	1	6	4
○●●○△	A	8	0	2	3	5	1	1	0	0	2 0	1 6
	BC	5	0	1	1	6	0	1	2	0	1 6	7
○●○○△	A	0	0	5	3	1	0	0	0	0	9	9
	BC	0	0	1	3	2	0	0	0	0	6	6
●○○○△	A	2	0	2 8	3	8	0	0	1	0	4 2	2 0
	BC	1	0	4 1	2	5	0	0	1	0	5 0	1 4

表9 4拍名詞（助詞・助動詞が接続しない場合）

東京		0	1	2	3	1 4	2 4	計	異なり 語数
○●●●▲	A	2 4	1	5	2	1	0	3 3	2 4
	BC	1 2	1	8	3	0	4	2 8	1 9
○●●○△	A	3	0	0	5	0	0	8	5
	BC	2	0	3	0	0	1	6	3
○●○○△	A	1	0	6	6	0	0	1 2	8
	BC	2	0	2	4	0	0	8	4

性話者の中高と尾高の発音の出現率は近接していたのに対し、4拍の場合3拍目の次に下がり目のある発音になる割合が非常に少ないという違いはあるが)。

また、東京語で頭高型の語において、男女とも2拍目の次に下がり目が来る場合が多いというのも3拍名詞と同じである。ただし、3拍目以降に下がり目が来る発音が女性話者より男性話者の方に多いという相違点はある。東京語でその他の型になる語は、出現数が20回以下であり、傾向も見だしにくい。その中で、東京語で3拍目の次に下がり目が来る型の語は、男性話者では、平板で発音する割合が高い。この発音も「後退現象」の結果とすると、この場合だけ女性よりも後退が進んでいるということになる。しかし、これだけの数では、上で述べてきた傾向の例外とはまだできないであろう。

## 9. 特殊拍とアクセント

池代を含め、伊豆半島南西部では、東京語とは異なり、いわゆる特殊拍や母音連続/-ai/や/-ae/などの/-i・-e/の後（これらをまとめて、以下では特殊拍と呼ぶ。なお池代では、母音連続は融合する場合が多い）でも下がり目がくる。すなわち、これらの拍がアクセント核となりうるというわけである。これは先行研究でもすでに言及されているところである。この現象に関連して、山口(1996)では、下田市須崎方言のアクセントの語レベルでの特徴として、「特殊拍が下降をもつ。

（中略）基本的には『特殊拍後尾で下降する』というべきものか」（p. 418）としている。また、中條(1996)でも2. であげたように、「東京語で頭高型になる「貝、金、塔」など「第2拍に/i/、/N/、/R/が立つ語は、松崎では男女を問わず」尾高型に発音される」（p. 1004.）としている。いずれの記述も、特殊拍の後に必ず下がり目が来る、と明言した記述ではないが、可能性があると見ているように見える。

確かに、東京語では複合語のある種の発音（後部要素の直前に下がり目が来る場合、前部要素の最終拍が特殊拍の場合、下がり目が前後に移動するとされるが、そのまま特殊拍の後ろに下がり目を置く発音

表 1 0 3 拍名詞（助詞・助動詞が接続：2 拍目の拍の種類別）

東京			0	1	2	3	14	13	24	134	計
○●●▲	A	一般拍	8 9	5	3 1	1 5	1	1	1	1	1 4 4
		特殊拍	3 1	2	7	5	1	2	0	0	4 8
	B C	一般拍	5 4	3	3 9	2 6	2	0	5	0	1 2 9
		特殊拍	1 6	1	1 6	2 2	0	0	2	0	5 7
	総計	一般拍	1 4 3	8	7 0	4 1	3	1	1	1	2 7 3
		特殊拍	4 7	3	2 3	2 7	1	2	2	0	1 0 5
○●●△	A	一般拍	1 4	0	4	3 3	2	0	0	0	5 3
		特殊拍	5	0	1	1 0	0	0	0	0	1 6
	B C	一般拍	1 6	0	0	5	1	3	2	1	2 8
		特殊拍	6	0	1	3	0	0	0	0	1 0
	総計	一般拍	3 0	0	4	3 8	3	3	2	1	8 1
		特殊拍	1 1	0	2	1 3	0	0	0	0	2 6
●○○△	A	一般拍	4	2	3 0	3	0	0	1	0	4 0
		特殊拍	5	2	4 5	4	0	0	2	0	5 8
	B C	一般拍	0	1	1 3	9	0	0	0	0	2 3
		特殊拍	4	3	1 4	3	0	0	0	0	2 4
	総計	一般拍	4	3	4 4	1 2	0	0	1	0	6 3
		特殊拍	9	5	5 9	7	0	0	2	0	8 2

表 1 1 3 拍名詞（助詞・助動詞が接続：3 拍目の拍の種類別）

東京			0	1	2	3	14	13	24	134	計
○●●▲	A	一般拍	9 0	3	3 2	1 3	2	3	1	1	1 4 5
		特殊拍	3 0	4	6	7	0	0	0	0	4 7
	B C	一般拍	4 9	2	4 4	3 1	1	0	5	0	1 3 2
		特殊拍	2 1	2	1 1	1 7	1	0	2	0	5 4
	総計	一般拍	1 3 9	5	7 6	4 4	3	3	6	1	2 7 7
		特殊拍	5 1	6	1 7	2 4	1	0	2	0	1 0 1
○●○△	A	一般拍	3	0	4	7	0	0	0	0	1 4
		特殊拍	0	0	2	5	0	0	0	0	7
	B C	一般拍	4	0	2	4	0	0	0	0	1 0
		特殊拍	2	0	0	7	0	0	0	0	9
	総計	一般拍	7	0	6	1 1	0	0	0	0	2 4
		特殊拍	2	0	2	1 2	0	0	0	0	1 6
●○○△	A	一般拍	8	4	7 3	7	0	0	3	0	9 5
		特殊拍	1	0	2	0	0	0	0	0	3
	B C	一般拍	4	3	2 6	6	0	0	0	0	3 9
		特殊拍	0	1	1	6	0	0	0	0	8
	総計	一般拍	1 2	7	9 9	1 3	0	0	3	0	1 3 4
		特殊拍	1	1	3	6	0	0	0	0	1 1

も最近はよく聞かれる）などを除き、特殊拍の後ろに下がり目が来る発音はほとんどないので、この地域のアクセントを聞くと印象に残る。

ではこの地域の方言において、特殊拍があればその後ろに下がり目が来る、というようなアクセントへの影響をもつのであろうか。3 拍名詞の 2 拍目に特殊拍が来た場合とそれ以外の拍（一般拍）で発音に違いがあるか（表 1 0）、名詞の語末 3 拍目に特殊拍が来る場合と一

般拍が来る場合に違いがあるか（表 1 1）を検討する。なお、東京語のアクセントでは、上記のように特殊拍の後ろに下がり目が来ることがないので、表 1 0 では東京語で中高になるという語はなく、表 1 1 では尾高になる語はないので、省略する。

検定の結果としては、特殊拍の後ろの場合と一般拍の場合で現れる形に有意な差はないと見て良い（ただし、それぞれ特殊拍が現れる語の出現頻度が少ない点が問題ではあるが）。また、これに関しては、男女話者の間でも違いはない。中條(1996)があげている「貝、金、塔」などは、東京語で頭高になる語であり、東京語で頭高になる 2 拍の語は、尾高でもよく発音される、という事情によるものであろう。

## 1 0. まとめ

以上、松崎町池代方言における自然談話を資料として、先行研究で言及されてきた点について、数量的な面からの実態を見てきた。そして、揺れが見られるとされていたグループの語については、どの程度の割合で各種の発音がなされているのかを示した。さらに、ある程度安定しているとされていたグループの語でも揺れが見られることも示した。ただし、アクセントが曖昧になっているのかと言え、そうとは言いきれず、グループによって発音の現れ方に傾向があり、それぞれまとまりを保っていることも見て取れた。

さらに、男女（あるいは個人）により差がある場合があり、今回の談話でいえば、男性話者より女性話者の方に、東京語のアクセントから見ると下がり目が後退した発音が多く見られた。また、東京語とは異なり、特殊拍の後ろに下がり目が来ることが避けられるということはないが、特殊拍がアクセントの形に関与することもない、と言えそうである。

この地域のアクセントについては、明らかにすべきことは多く残っている。たとえば、本稿では男女話者の差としてきたが、果たして本当に男女差なのか、また男女差であるとするなら、なぜ男女差が生まれたのか。語のアクセントではなく、文レベルのアクセントはどのよ

うに記述・解釈されるべきものなのか。語レベルのアクセントと文レベルのアクセントは関係があるのか、あるとすればどのような関係であるのか。最初にも述べたように、若年層では東京語と同じような発音になっているが、これはどのような過程を経たものなのか、その際、語レベルのアクセントと文レベルのアクセントはどのように関与しているのか。逆に、どのような経緯を経てこのアクセントが成立したのか、そしてなぜこのような揺れが生じているのかなど。これらについては、今後、他の談話資料、読み上げ式の調査などを含め考察を加えていきたいと考えている。

なお、本研究は平成 15 ～ 17 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））「静岡県下『言語の島』における言語変容に関する基礎的研究」によるものである。

## 参考文献

- 亀田裕見 1994 「自由変異体の多い方言音調の構造的記述－静岡県南伊豆町方言における 3 拍名詞について－」『国語学』179
- 金田一春彦 1943 「静岡・山梨・長野県下のアクセント」『日本音声学協会会報』72・73、74・75
- 金田一春彦監修 秋永一枝編 2002 『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 中條 修 1976 「南伊豆町の音韻体系」『地方史静岡』6
- 1983 「静岡県の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』国書刊行会
- 1996 「伊豆南部特殊アクセント」『平山輝男博士米寿記念論集 日本語研究諸領域の視点』明治書院
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編集 2000-2002 『日本国語大辞典第二版』小学館
- 前川秀雄 1970 「静岡県のアクセント」『方言研究の問題点』明治書院

- 馬瀬良雄 1961 「山梨・静岡・長野」『方言学講座第2巻 東部方言』  
東京堂
- 山口幸洋 1987 「アクセント」『図説静岡県方言辞典』吉見書店
- 1995 「南伊豆アクセントに関わる亀田氏の方法について」  
『国語学』183
- 1996 「下田市須崎のアクセント」『論集 言葉と教育』和泉  
書院
- 1998 『日本語方言一型アクセントの研究』ひつじ書房
- 2001 「下田市アクセントの70人調査（1）」『静岡・こと  
ばの世界』4
- 2002 「下田市アクセントの70人調査（2）」『静岡・こと  
ばの世界』5

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学言語科学研究科

kigawa@kanda.kuis.ac.jp